

# 家庭教育支援協会

会報誌 13号

## 「ゆるいつながり」が広がる社会に

家庭教育支援協会理事長  
二川 早苗

「なかなか進みませんね」「私もこんなに待つと思いませんでした」。新型コロナウイルス感染が猛威を振るうなか、学校が休校になると決まった翌日のスーパーでの会話だ。「上の階は、もっとすごいですよ。トイレトペーパーが売切れたら空くかも」と教えてくれる人もいる。

まったく知らない他人同士、声を掛け合う風景をあちらこちらで見かけた。これは珍しい。オレオレ詐欺や不審者の出没、町をぼーっと歩いていれば、歩きスマホにぶつかってしまうご時世だ。知らぬ間に見知らぬ人に用心深くなっている。リスクばかり考えて偶然の出会いを楽しむことを久しく忘れていた。余裕がないのだ。

計画を立てて間違いのない人生を送ることを是とする価値観は私たちに先に見える安心を与えてくれる。しかし、その価値観が根こそぎもっていかれてしまう理不尽さを私たちは何度も経験してきた。九年前の東日本大震災。その前でも後でも遭遇した様々な災害、理に適わない事件、事故。そのたびに、私たちはなぜと問いを発し、出口のない解に唇を噛み締めてきた。

日々あらゆる準備をしても、想定外は起きてしまう。だとすればそのリスクを分散するにはどうすればよいのだろう。その一つが冒頭にあげた日常の人々とのゆるいつながりだ。家族が助け合うことができれば、それに越したことはない。しかし、様々な事情でそれが十分に行えないこともある。家族の助け合いだけを絶対的な正解としてしまうと、家族は社会に対して閉じてしまい、社会は家族にだけ責任を押しつけてしまう。閉ざされた空間で何が起きていたか。漸く明るみにでてきた虐待やDVの問題が再び潜在化しかねない。

家族に無謬性をみることのあやうさを家庭教育に携わる者として戒めたい。とはいえ、家庭が不確実なものから身も心も守ってくれる安全基地であることに変わりはない。そのうえで、「ゆるいつながり」にも手を貸してほしいのだ。「小さな借り」と「小さな貸し」ができる社会は、きっと余裕のある社会にちがいない。



## 活動報告① 家庭教育支援協会第1回会員研修会

2019年5月18日

今年5月18日(土)に行われた家庭教育支援協会第1回研修会では『カフェ・デ・家庭教育』と題して家庭教育支援協会について語り合いました。内容をご報告申し上げます。

### 『カフェ・デ・家庭教育』

今回の研修会では、座談会のような形で参加者全員からご意見や感想などを発言いただきました。一つめは家庭教育支援協会のあり方についてそれぞれの思いを語り合いました。活動の方法、ホームページのこと、資格の活かし方、また退会者が出ることについてなど、批判はせず意見を尊重することを約束した中で発言いただきました。前向きな意見もあれば、支援協会の在り方にシビアな見方も多く上げられ、これからの課題として一つ一つが貴重なご意見となりました。

もう一つは、家庭教育支援協会の10周年記念企画について、理事以外の会員の皆さんも交えて考えました。理事同士で話し合いを重ねておりますが、見えていなかった部分にも気づくことができました。10周年記念誌を発行しよう、会員同士で合宿をしよう、泊りがけと日帰りパターンも考えようなどと、盛り上がりました。

2019年の研修当時とは情勢が変わり新型コロナ・ウイルス感染の問題が大きくなり、どこまで実現できるか、いつできるのかなど不安な状況ではありますが、10年皆さんで頑張ってきた労を労う意味でも実現ができればと考えていますので、後報をお待ちいただければ幸いです。(田光 江実子)

## 活動報告② 家庭教育支援協会第2回会員研修会

2020年2月8日

今年2月8日(土)に行われた家庭教育支援協会第2回研修会で田光江実子氏の発表された内容をご報告申し上げます。

### 児童虐待の現場から

家庭教育アドバイザー 田光 江実子



某政令市の家庭児童相談室にて家庭相談員として勤めて8年半になります。今回の研修会では、繰り返される児童虐待の報道を受けて現場に携わる者の目線からお話をさせていただきました。

資料は用意しましたが、今回参加された皆さんからの質問を受ける形で進めた研修会でした。民生委員を長年勤め上げられた城条さんからもそのお立場から見えたお話もいただくことができました。

まず関心が高かったのは、一時保護や施設入所のことです。一時保護の判断、施設入所や里親委託に至る経緯、また在宅での養育に対する支援など、当市児童相談所との連携の中で見てきたことを、多少のケース実話も混ぜてお答えしました。また、「#神待ち」のサイバーパトロールに纏わり、大人が積極的に子どもたちに働きかけ、どう(性)被害を防げるのか、可能性について意見交換しました。男女で発言が異なることも勉強になりました。

初めて講師という立場で研修会でお話させていただきましたが、内容的にあらかじめ質問をいただいていたほうが良かったというのが反省でした。そのくらい参加者のみなさんの関心の高さがうかがえた研修会でした。

## 活動報告③ 日本家庭教育学会第33回大会～個人発表～

2019年8月17日

昨年8月17日(土)に行われた日本家庭教育学会にて家庭教育支援協会より個人発表された御三方の内容をご報告申し上げます。

### 生と死に向き合う家庭教育 ―死から生への意味づけ―

家庭教育支援協会理事長 二川 早苗



生まれてから死ぬまで、その大部分を過ごす家庭において、生と死は日常にあった。しかし、今、家庭は生からも死からも遠ざけられている。出産も臨終も病院でとり行われることが大半だ。そのような環境でわれわれは「いのちの重み」をどうやって実感できるのだろうか。児童虐待やいじめ、ハラスメントによる死、SNSに誘発された重大犯罪等をみるにつけ、「いのちの重み」をそこから読み取ることはできない。

死はあらゆる個人に不可避に訪れるのだ。自然は死すべき時を教えてくれない。日常のそこかしこに潜んでおり、突然何の前触れもなく訪れることもある。誰もが避けることができない「死」に向き合い、自己の死への自覚と他者の死について考えることで「いのちの重み」を習得することはできないだろうか。

本論文では、死生観の認識を発達段階に沿って述べたのちに、学校教育における「死への準備教育(death education)」について、その社会背景から考察する。そのうえで、「死」から「生」への意味づけを家庭教育が担うことの意義について検討することを目的としている。

### 子育て中の親が求めるもの ―個人活動の集計結果から見える欲求―

家庭教育アドバイザー・国家資格キャリアコンサルタント  
柳川 由紀

家庭教育支援における「親の学び」に10年余り携わる中で見えてきた変化がある。当初、未就学児や小学校に通う子どもを持つ親からの相談が中心であったが、最近では中高生、大学生の親をはじめ、高校生や大学生本人からも今後の自分の将来についての悩みや、母親自身からは働き方や今後のライフプランについての相談が寄せられるようになった。

過去10年余りの相談内容をまとめた結果、子育て中の親が今求めているものは、大きく3つ。一つは、「子どもの非認知能力の高め方」。二つ目は、その非認知能力を高めるために、「すぐ実践できる具体的行動マニュアル」、三つ目は「親自身の自己理解」である。

一方、社会環境の変化に伴い、「子どもとSNS」「キャリア教育」「孫育て」などの相談が増加傾向にある。そのため今後は、これらに関する学びも今以上に求められると推測される。





## 家庭を飛び出し、IT 情の世間とつながる子供達 — 幻想である家庭と家庭教育 —

家庭教育支援協会 平林 直人



かつて家庭は子供にとってサナギが宿る殻であった、子供が社会と接する前に社会のこと、人として正しいことを教えるための時間と場を作り、良き社会人として育て上げてから社会に出すことができた。ところが、スマートフォンが普及し、家庭で社会観や人間観を育てる間もなく社会との接点を持つことになり、家族の知らないところで見ず知らずの大人から様々な影響を受ける可能性が高い時代になった。小学校 6 年生が SNS で知り合った大人に誘われて家出をする事件があったが、同じような事件は数多く起っている。

これからはネットリテラシー教育を小学生にも行う必要があるとが、それだけでは足りないと思う。生き方や価値観を小学生のうちからきちんと考えさせる教育を行うとともに、コミュニケーションや論理力を身につける必要があると考える。

### 活動報告④ 家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会 2020年2月8日

今年 2 月 8 日に日本家庭教育学会主催『家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会』が開催されました。活動発表された石井氏に報告していただきました。

#### 不登校予備軍 — 「行けなくなる」前に —

家庭教育アドバイザー 石井 登



文科省 2018 年度学校基本調査によると、不登校中学生は約 12 万人で過去最高となっている。一方、不登校には定義されないが、何らかの理由で学校に馴染めず「学校には行きたくない」と思っている中学生は 40 万人近くに達する(日本財団「不登校傾向にある子供の実態調査」より推計)という。彼らにとって厄介なことは、「学校に行かない」ことではなく、親や教師たちが大人の論理をかざして「行けなくなる」まで耐えさせようとする事です。

Y さん(公立中学1年女子)は、いじめや日増しに荒れる学級の状況に馴染めず、2学期から学校への行き辛さを強く感じます。その時の自分の思いを手紙にしたため、また、学校関係者やスクールカウンセラー、親、自分の考えなどをホワイトボードいっぱい書き記すようになりました。Y さんが書き記した言葉を検証していくと、辛さや心の痛み、苦しみを懸命に訴え思案する様子が読み取れます。やがて、強引にでも学校に来させようとする教師や親の態度に深く傷つきます。わたしには、Y さんが『多様な生徒が集まる学校での画一的な指導・教育』や『親の身勝手な価値観』の犠牲者のように見えてきました。でも彼女の戦いはまだ続きます。

原因は何であれ、Y さんのように学校への「行きづらさ」を抱える中学生が数多く存在し、誰にでも起こりえることを十分認識して欲しい。その上で、何か起これば、大人の論理による対応ではなく子どもに寄り添う姿勢を見ることが大切です。

#### <編集後記>

発足 10 周年の会報誌を編集している今、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による不自由さ、困難さを感じています。不自由なだけでなく社会全体がギスギスして、生きにくい日本になっていると感じられます。それぞれに苦しみを抱えていると思いますが、思いやる心をもって、閉塞感の中であって細やかでも楽しめることを見つけて乗り切りたいものです。